

# 美術史学

## ◇教員◇

教授：佐藤康宏、秋山聰

准教授：高岸輝

## ◇学生◇

学部：35名、修士課程：8名、博士課程：12名

### (1) 美術史学へのいざない

形あるもの、眼に見える世界への飽くなき追究、それが美術史学です。芸術の研究は文学部の重要な使命のひとつですが、なかでも視覚が捉える色と形、そこに宿る美を具体的な造形に即し、歴史的に考究する点に美術史学の特徴があります。

研究対象となる具体的な造形は、古典的な芸術作品としての絵画・彫刻・建築、実用と美を兼ね備えた工芸やデザインなどを指すことが多いのですが、写真・映像・インスタレーションなど現代アートの領域まで含みます。また、扱う地域も日本、アジア各地、中近東、欧米まで広がっています。

美術史は、高校までほとんど教育が行われていないため親近感が湧きにくいと思います。しかし、コンピュータ処理による画像や情報通信端末など、視覚表現の技術と可能性が日進月歩で進化する現代において、それらのリテラシーに長じ、容易に使いこなしている皆さんにとって、ビジュアルな学問である美術史は決して敷居の高い分野ではありません。

必要なのは視覚的な美に対する強い関心、ものを作り出す人間の営みに対する敬意、創造という行為への参加意欲。美術史学は、机上と造形のある現場とを往還する、アクティブな学問です。視覚で世界の認識する感性と、遺された作品や文献の断片をつなぎ合わせて巨大な歴史の潮流を把握する知性、両者のハイブリッドが重要です。

美術やデザインに強く惹かれる人、世界中を旅することに憧れる人、美術館・博物館での学芸員や文化行政に携わりたい人、あるいは自ら表現者たらんと欲する人、そんな人々を歓迎します。最高の作品を体験し、鍛え上げられた

眼と感性と知性は、将来、どの分野に進もうとも強い武器になるはずです。

## (2) 美術史学研究室の人々

研究対象となる時代や地域の広さに応じて、講義や演習も多彩に用意されています。美術史学研究室は赤門のすぐ近く、赤門総合研究棟の7階にあり、3名の専任教員が所属しています。

佐藤康宏教授は、江戸時代の日本美術史が専門です。近年は、岩佐又兵衛や伊藤若冲といった個性豊かな絵師に関する著作、日本美術史を概観する通史、平安・鎌倉時代の絵巻から大正期の洋画まで、その研究は深く広く展開しています。美しい画像を映写しながら、欧米の新たな方法論を駆使して作品を一刀両断、鮮やかに読み解いていきます。

秋山聡教授は、ドイツ・ルネサンスの巨匠デューラーなど西洋美術史が専門。現在は各地のキリスト教会に秘蔵される聖遺物(キリストや聖人にまつわる遺品)の研究でも知られ、宝物と美術の境界、宗教儀礼と美術の関係など文化的な視野へと広がっています。

高岸輝准教授は、中世の日本美術史が専門。最近の関心は絵巻で、国内外の作品調査に力を入れています。駒場キャンパスでSセメスターに「日本美術史入門」の講義を担当していますので、覗いてみるとよいでしょう。

加えて、学内から次の教員が美術史学に関する講義・演習や論文指導に当たっており、地域や時代を幅広くカバーしているという点で国内随一の充実度を誇ります。

東洋文化研究所の榎屋友子教授はイスラーム美術史の専門で、東洋と西洋をつなぐ美術の交流についても論じています。優しい語り口に、学生たちは癒されます。同研究所の板倉聖哲教授・塚本麿充准教授は中国絵画史を専攻し、東アジアを舞台に調査研究を進めています。学芸員の経験を生かし、国内の展覧会企画にも数多くかかわっています。総合文化研究科・教養学部の三浦篤教授はフランス近代美術の専門。駒場での講義にはぜひ足を運んでいただきたいですし、本郷での講義も毎回多くの受講者を集めています。

いずれの教員も、自らの専門だけでなく、他の地域や時代の美術に対する強い関心を持っています。おのずと、地球的規模での比較文化的な視野が研究室には醸し出されることとなります。学部生、大学院生、留学生も同様で、多言語が飛び交い、研究室には海外からの研究者もしばしば訪れます。外国語に自信がなくとも心配は無用。美術史学の共通言語は造形であり、視覚を介したコ

コミュニケーションは時に言葉をも超えるからです。

授業は上記のほか、文化資源学研究専攻の木下直之教授が日本近代美術を扱う講義も、美術史学の特殊講義として認定されています。また、学外から非常勤講師を招き、各分野の最先端を語っていただいています。本年度の例を挙げると、岩佐光晴講師(成城大学教授)「日本彫刻史の諸問題—8世紀を中心に」、河本真理講師(日本女子大学教授)「西洋近現代美術の諸相」、木俣元一講師(名古屋大学教授)「ゴシックの宗教空間と美術」(集中講義)、飛ヶ谷潤一郎講師(東北大学准教授)「イタリア・ルネサンス建築および都市」(文化交流特殊講義)、河村英和特任准教授「ヨーロッパ風景文化史」「ヨーロッパ建築文化史」(集英社高度教養寄付講座)、諸川春樹講師(多摩美術大学教授)「ルネサンス美術の世界」(集英社高度教養寄付講座)が開講されています。

### (3) 美術史学専修での日々

美術史学研究室に進学すると、たいていはSセメスターに3～4泊の見学旅行が行われます。旅行ゼミと通称され、教員が引率し、院生が幹事となって、主として関西方面の美術館・博物館や寺社仏閣などを巡ります。3年生には課題となる作品が設定され、事前に研究論文等を調査し、見学の際には作品の前で解説を行います。図録に掲載された写真と、現場で観る作品とは印象が大きく異なることに驚くはずです。机上の印刷物や講義で映写される写真と、本物から受ける感覚との差。それを認識し、補正し続けることが研究には必須です。作品を前にして、教員や院生たちは沈黙したり、饒舌になったりします。美に惹きつけられながらも、限られた時間の中で作品を凝視し、考察を巡らせる美術史家の姿に出会うこととなるでしょう。また、旅行ゼミは同級生や研究室のメンバーと交流する良い契機であり、訪問先の地域で活躍する美術史学卒業生との懇親会も企画されます。学芸員や大学教員となった先輩から、現場の話や学生時代の思い出を直接うかがうことができます。

語学についても、駒場時代に引き続き研鑽を重ねる必要があります。日本・東洋美術史を目指すなら、古文、漢文、くずし字、中国語などを読む必要があり、西洋美術史であれば、英語、フランス語、ドイツ語のほか、研究対象によって古代ギリシャ語、ラテン語、イタリア語、オランダ語、スペイン語などに挑戦することになるかもしれません。

講義や演習に関しては、全てに出席することは不可能なほど幅広く設定されていますので、3年生のうち、日本、東洋、西洋とバランスよく受講するこ

とをお勧めします。少人数で開催される演習は、外国語文献の講読だけでなく、一枚のスライドを巡って活発な議論が展開される切磋琢磨の場です。また、大学院進学を少しでも考えている人は、学芸員資格の取得についても検討する必要がありますでしょう。

やがて、4年生の6月になると卒論指導会が開催され、教員と同級生の前で卒業論文の構想を発表することになります。卒論テーマの設定や論文執筆については、伝統的に学生の自主性を尊重する形をとっています。ですが、放任というわけではありませんので、教員や先輩を積極的に活用し、美術史学の方法論と研究史を着実に踏まえた、力作を期待しています。扱う作品は著名なものほど謎に満ち、研究論文も多いため、知的訓練としての卒論には好適といわれています。夏休みなどの長期休暇には国内や海外の美術館等を訪れて、卒論で扱う作品を観に行く、という人も多いようです。

#### (4) 研究室の外へ

東京大学で学ぶということは、首都圏をキャンパスとすることにほかなりません。東京という都市は、美術館・博物館の数やコレクションの質、世界中から巡回する展覧会の内容において、ニューヨーク・パリ・ロンドンに匹敵しません。美術史を学ぶ上で、これほど有利な位置はありません。本郷キャンパスから徒歩20分以内で、上野公園のミュージアム群（東京国立博物館、国立西洋美術館、東京都美術館、東京藝術大学大学美術館など）にアクセスでき、東京国立博物館、国立西洋美術館では、東大の学生証を提示すれば常設展が無料（特別展は割引）で観覧できることも覚えておいてください。東京国立博物館資料館、東京文化財研究所では、写真や図書の閲覧を行うことも可能です。本郷から電車で30分以内ということになると、訪問できる美術館は無数といってよいでしょう。

#### (5) 卒業後の進路

卒業生の進路はさまざまです。学部卒に関しては、公務員、マスコミ、商社、広告代理店、製造業、金融、システムエンジニア、ゲーム会社など幅広く、美術系の出版社など美術史を学んだことを生かした就職をする人もいます。近年は東京大学の職員になる人も続いています。

大学院は、年度によって増減があるものの学内外からの志望者を多く集めています。進学のためには充実した卒業論文を提出、外国語2科目と日本・東洋・

西洋美術史についての専門試験からなる1次試験に合格し、卒業論文に基づく口述試験を突破する必要があります。修士論文は、専門について深く掘り下げ、作品そのものの調査や作家に関する一次資料を実証的に考究し、学術論文として公刊できる水準が理想です。優れた修士論文の場合、博士課程進学後に学会発表や学会雑誌への投稿を勧めており、査読を通過して論文が公刊されると研究者への第一歩を踏み出したこととなります。その後は、博士論文の執筆に向けての研究ということになりますが、外国の美術を扱う場合、博士課程の時点で留学する人も多く、留学先で博士号を取得するケースもあります。修士課程修了後、あるいは博士課程在籍の段階で、学芸員に採用される人もコンスタントに出ています。

駅や街角で見かける美術展覧会のポスターの陰には、学芸員がいます。華やかな展覧会の裏側で、地道な研究、文化財の保存、社会人や子供に対する教育普及などが行われています。美術史研究室の教員は、展覧会の企画・監修、展示作品の調査、カタログの執筆、講演会の講師といった形で、ミュージアムの現場、そして学芸員と密接に交流しながら、研究教育活動を進めています。学芸員を目指すにせよ、大学教員を目指すにせよ、研究職への就職は決して広き門ではありませんが、美に対する情熱を維持しつつ、じっくり腰を据えて研究に励むことで、おのずと道が開けてくるのではないのでしょうか。卒業生たちの活躍は、明治以来の美術史学を牽引するとともに、我が国の美術の振興に大きく寄与しています。